

業界短信

(26年9月～10月)

アカシ、厚板加工量が回復、売上も“リーマン前”射程（産業新聞、9/29）

㈱アカシ（愛知県高浜市、加藤純也社長）は、2014年10月期の加工量がリーマンショック以前の水準まで回復している。景気回復に伴う需要家からの発注増に加え、加工設備や品質保証体制の拡充などによる需要家との信頼関係の強化、流通業者を介した店売り向け切板加工の拡大などにも注力してきた成果で、同期の売上高や収益面でもリーマンショック以前の水準を回復する見通しである。同社は、レーザ2基、ガス1基、プラズマ1基などの設備を有し、重仮設リースや橋梁耐震補強ブラケットなどの土木向けや天井走行クレーン部材向け、店売り向けに中板及び厚板の切板加工を手掛けている。

旭鋼材工業、NCガス切断機更新、橋梁にも対応。穴開け機も増設（産業新聞、9/30）

旭鋼材工業㈱（延岡市、四位靖弘社長）はこのほど、NCガス切断機1基を更新した。同時にレール長さを28mに延長することで長尺の加工が可能になり、橋梁など新規分野に加工範囲を広げ、多様化するユーザー・ニーズに応える考え。また新たに穴開け機を1基を増設。効率化によるさらなる短納期化を進め、同社が強みとする製缶向け加工や小ロット対応を一層強化する方針。

F・ヒロタキ、ファイバーレーザ導入。19mm厚まで切断、切板需要増に対応（鉄鋼新聞、10/2）

F・ヒロタキ㈱（千葉県白井市、中島秀明社長）は、門型ファイバーレーザ切断機を導入し、10月から営業運転を開始した。板厚19mmまでを対象に、これまで外注委託していたレーザ切板を内製化しつつ、建築向けを中心に漸増する切板受注量に対し、既存のガス、プラズマと合わせて注文内容や納期にきめ細かく対応できる体制を整えた。

高砂金属工業、子会社の切り板再整備完了。中部地区、数量50%伸長へ（産業新聞、10/3）

高砂金属工業㈱（海部郡飛島村、高木唯夫社長）は、災害発生時の事業継続対策（BCP対策）を強化している。敵的な避難訓練に昨年から安否確認の訓練も追加。パソコンサーバーの上層階への移設なども行い、地震や津波などの災害から社員や管理システムを守るとともに、その後の復旧も可能な限り早めることで、事業継続性の確保に努めていく姿勢だ。

JFE鋼材が設備増強。切板4拠点、レーザ、プラズマなど。需要増捕捉、生産弾力性も確保

（鉄鋼新聞、10/3）

JFE鋼材㈱（大阪市西淀川区、小谷浩史社長）は、2011年から中国向けに鋼材

輸出を行っているが、今年6－8月の輸出量は一定水準を達成した。中国で日本向けの鉄骨・プラントを製作する企業に材料供給しているもので、輸出量は、6－7月が月間300トン程度、8月は1000トン近くとなった。同社の直近の月間加工量は、自社が1500トン、外注に700トン程度出している。

JFE鋼材、商慣行改善に着手。コスト明確化、適正対価を受領へ（産業新聞、10/9）

JFE鋼材㈱（中央区八丁堀、石原慶明社長）は、厚板加工での2次加工の増加や煩雑化、小単重化による収益圧迫を勘案し、非合理的な商慣行改善に乗り出した。加工業務の量的増加や複雑化を受け、コスト負担が上昇しているのに対し、十分な対価が得られていない慣行が拡大していることから、実態に即し、要したコストを明確化、適正な対価を受領できる契約を指向、歩留補償など収益確保につながる仕組みづくりを目指す。これに伴って来年度以降、契約に際するデータ管理などの作業工程の増加を加味し、業務システムを刷新する。需要環境が回復している期間内に商慣行改善を含め、体制を強化、再生産可能な収益構造を構築していく。

千曲鋼材、茨城で加工体制拡充。製缶中心に高付加価値化、新規需要を捕捉。

（産業新聞、10/14）

千曲鋼材㈱（浦安市、神鳥勉社長）は、茨城事業所と100%子会社の茨城チクマでの加工体制を拡充する。1月に開始したコマツ向け大型ダンプトラックのベッセル（荷台）生産が伸展、茨城チクマが手掛けるベッセルなど製缶部門と、茨城事業所での溶断事業の中間に位置する2次加工部門を充実、製缶を中心に高付加価値化を図る。老朽化したガス溶断機などをプラズマ、レーザに更新、加工能力を高める方向で検討を始めた。鉦山機械の回復をにらみ、今後2年程度で人員を含めて体制を強化、新規需要を捉える。

日鉄住金神鋼シャーリング、生産効率引き上げへ。下期中に1～2割。加工ライン見直し

（産業新聞、10/15）

日鉄住金神鋼シャーリング㈱（大阪市、浅野博之社長）は、下期中に1－2割の生産効率引き上げを目指す。切断加工ラインや2次加工分野の見直しに加えて、現場改善など細かい部分の積み重ねで作業効率化を進め、ミニム投資で生産性を向上させる方針。

大鹿シャー工業所、2工場の加工機能強化。本社レーザ2基体制に（産業新聞、10/16）

㈱大鹿シャーリング工業所（名古屋市中川区、大鹿功雄社長）は、既存設備の老朽代替などに伴い、本社、半田の両工場、加工機能の強化を進めている。このほど、本社のレーザを2基体制に増強したほか、半田工場ではバンドソーなどの切断機を更新。需要家ニーズへの機敏な対応で、加工量の安定化につなげていく考えである。

高砂金属工業、鋼板2次加工設備更新。中部工場、幅広いニーズに対応（産業新聞、10/20）

高砂金属工業㈱（高石市、宮崎吉二社長）は今月から、子会社の木津川建材加工の中

部工場の鋼板二次加工設備の再整備を進める。鋼板用の自動開先加工機1基と、NC孔明け機1基を更新、中部地区における幅広い鋼板加工ニーズに対応するのが狙い。

小谷鋼業、川崎重工から優秀サプライヤー表彰。品質向上で金賞受賞（鉄鋼新聞、10/21）

小谷鋼業(株)（大阪市西淀川区、小谷浩史社長）は、川崎重工業から同社の品質向上に貢献した優秀なサプライヤーとして07年から8年連続で表彰。長年の功績が認められ、このほど金賞を受賞した。同社は建築・橋梁向けが主体だが、長年、川崎重工業向けの溶断加工も手掛けている。

仙台シャーリング、切板2次加工設備が本格稼働。管理システムも更新（鉄鋼新聞、10/22）

仙台シャーリング(株)（宮城県岩沼市、林理明社長）は、穴明け、開先加工など切板二次工程への進出に向けた設備投資を行った。NCドリルマシン2台、開先加工機1台、及びショットブラスト設備1台を9月中旬に導入、今月から本格稼働したほか、併せて販売管理、進捗状況、CAD、ミルシート管理などの管理システムも更新し、生産性向上に取り組む。

茨城スチールセンター、HPをリニューアル。「見やすく、分かりやすく」（鉄鋼新聞、10/21）

茨城スチールセンター(株)（茨城県那珂市、村田寛和社長）は、web上に公開するホームページをリニューアル化し、10月16日からアップした。「見やすく、分かりやすい」をコンセプトに、写真の多用を抑えながら、図解やグラフを採用し、構図やアピール手法を統一することで、シンプルながらPR度の高い画面とした。

熱金鋼業、豊橋に新工場建設、東三河でサービス向上（産業新聞、10/21）

熱金鋼業(株)（愛知県弥富市、山村彰弘社長）は、愛知県豊橋市内の工場団地に新工場を建設する。来年中の稼働開始を目指す。東三河地区の需要家に対する納期対応力などのサービス向上や、運送コストの削減につなげていくことが目的で、工場建屋規模や導入設備などの詳細を決めていく計画である。

アマダ、新レーザ加工技術を開発。省エネ化、切断能力向上（鉄鋼新聞、10/27）

(株)アマダ（神奈川県伊勢原市、岡本満夫社長）はこのほど、世界初のダイレクト・ダイオード・レーザ（DDL）で板金切断できる新レーザ加工技術「エグザック」を開発した。高効率、省エネ等によって低コストパフォーマンスを実現。今月21～25日にドイツ・ハノーバー市で開催された「EuroBLECH2014」で初めて公開された。

清水、加工効率化に注力。H形鋼穴あけ機など導入（鉄鋼新聞、10/31）

(株)清水（鳥取市、清水昭生社長）は、9月中旬にH形鋼用ドリルマシンと鋸切断機を更新し、鉄骨加工など建築需要に対応すべく、鋼材加工の効率・品質向上に取り組んでいる。前期には太陽光発電にも進出し、来年3月までに加渡航工場の屋根部分に発電パネル取り付け工事を行う。

丸久鋼材が「第4回企業祭(喜業祭)」開催。社員が手作り企画。地域に定着、過去最高の800人参加 (鉄鋼新聞、10/31)

丸久鋼材(株)(久留米市、待鳥寿社長)は25日、本社敷地内で、「第4回企業祭」を開催した。地域住民をはじめ、得意先や仕入れ先などから過去最高の800人が参加。日頃の支援に感謝の意を伝えるとともに、盛り沢山のイベントを楽しんだ。

コマツ産機、3次元ファイバー加工機開発。加工スピード2倍速、来月発売 (鉄鋼新聞、10/31)

コマツ産機(株)板金事業部(石川県能美市)は、薄板を使った自動車用プレス部品などを成形できる3次元のファイバーレーザー加工機(TLHシリーズ)を開発した。11月から販売を開始する。

以上